



研修の現場から

技術を身につけるのはもちろんのこと、
研修の現場には「であい」があります

江別市では、JICAとの連携のもと平成15年度から「国別研修コロンビア地方行政開発計画」コースを受入れし、コロンビア共和国で地域開発や産業振興分野に携わっている公務員の皆さんを対象に地方行政や地域振興に関する研修を実施しています。

これは、コロンビアの地域社会や経済開発事業に中核的な役割を果たす職員の育成を目的としたもので、日本の行政・地方自治制度を中心に、住民との関わり、地域開発、地域の活性化、保有資源の付加価値を高めるための手法、各機関や団体との連携などを学んでいます。

これまでの2年間で19名が研修を受けられましたが、全員が同じ国から来ているだけに研修員同士の仲は良く、友好的な雰囲気です。研修が進んでいます。特に、市民との交流イベントでは、陽気な南米気質を存分に発揮し、毎回様々なパフォーマンスを提供してくれます。市民もラテン音楽と踊りに大いに盛り上がり、研修員と市民とがいっしょになって大きな踊りの輪を作っています。

このほかにも、小学校の訪問や大学の講義にゲスト参加し学生と意見交換を図るなど、交流に参加した方々から好印象を得ています。

毎年、約40日間の受入れですが、準備期間等を含めると1年のうち約半年は何らかの形で研修に関わっていることとなります。それだけに、受入側としては研修を無事に終えて帰国して行く研修員の姿を見ると、安堵感とともに多少の寂しさも感じています。

この研修は平成19年度まで5年間にわたって実施するものですが、今後も、こうした研修員との交流を通じて、地域住民や将来を担う子供たちが、国同士、人同士がお互いのことを理解することの大切さに気付くとともに、途上国や国際貢献についてより深く考えるきっかけになってくれることを願っています。

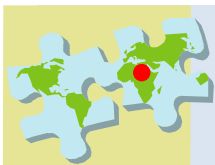
(江別市企画政策部佐藤貴志)



市民交流イベントでコロンビア料理を披露する研修員



プロジェクトで訪問したエジプトの女子中学校の様子。設備は日本と異なりますが、授業中の子どもたちの様子は日本とあまり変わりません



途上国の現場から

エジプト小学校理科教育改善
プロジェクト

エジプトの国立教育研究所の所員、カイロ市内の小学校算数・理科の教師たちとともに、児童が自ら考え自ら答えにたどりつくプロセスを重視した新たな授業法の導入・定着、そして普及を目的に活動をしています。仕事柄、エジプトの学校に行く機会が多いのですが、学校の様子は日本とあまり変わりません。教室にある設備などは違いますが、授業中の子供たちの様子とか昼休みの様子などは日本と大して変わりません。授業が終わって休憩時間になると、子供たちは待ちかねたように、いっせいに外へ飛び出していき、狭い校庭のそこそこで遊び始めます。また、休憩時間が終わると大騒ぎをしながら教室に戻っていきます。

現在、年度末試験がおわりちょうど夏休みに入ったところです。そのせいか、店で働く子供たちをよく見かけます。写真は個人経営のスーパーで働く子供です。

彼らは決まった店で働いているのですが、中には靴磨きをしている子供や、露店で焼きとうもろこし、野菜、果物などを売る子供もいます。

ここカイロは人口も多く、一大消費地であるため、子供の仕事も物を売ることが中心のようです。ナイルデルタであれば農家も多く、農作業を手伝う子供たちの姿も見られるだろうと思います。

最近の日本は子供の数も減り、元気をなくしてきているように思えてなりません。カイロ市内は決して住みやすい環境ではないのですが、大勢の子供たちが学校の内外で元気に遊んだり、仕事の手伝いをしたりしています。大人たちが、子供たちが遊ぶときでも働くときでも、それを見ているからなのかもしれないと思ったりしています。

*エジプト小学校理科教育改善プロジェクトは北海道教育大学、北海道教育委員会の協力のもと2003年から実施しています。

(杉山佳彦;エジプト用学校理科教育改善プロジェクト、チーフアドバイザー)



個人経営のスーパーで働く子どもたち